

動をしていることが新着標本からうかがい知ることができます。地質調査所では閉館2年目から専用ケースに新着の岩石、鉱物、化石の標本を展示するようになりました。海外からの標本はもちろんです、地質調査所の研究者の収集した“ホット”な標本が次々と展示されています。

欧米特にヨーロッパの博物館は歴史が長く、所蔵する標本も特定のコレクターの集めたものが含まれることが多く、コレクターの名前のついたコレクションが展示されることがあります。大英 N. H. M. のラッセルコレクション、キングスバリーコレクションは専用ケースに展示されています。スミソニアン N. H. M. ではレプリング、カンフィールド、オーバー等著名な鉱物学者のコレクションが紹介されています。また博物館の母体であるスミソニアン研究所の創立者 J. Smithson の肖像画と Smithsonite (菱亜鉛鉱) の様々な色の標本の展示も印象に残ります。

## おわりに

1973年に初めてヨーロッパの博物館を訪れてから今までアメリカでは8ヶ所の、ヨーロッパでは10ヶ国20ヶ所の博物館で鉱物の展示を中心に見てきました。どの博物館へ行ってもそれがたとえ2度目3度目であっても鉱物の展示室の入口に近づくとまるで恋人にでも会うような胸のときめきを覚えてしまいます。そして展示を見

終って博物館を後にする時、満足感が一杯になるとともにこんな展示のある博物館が日本にもあればという気持ちになります。そして標本館で鉱物の展示を見た見学者が展示を通して新しい知見を得て満足して展示室を後にできるよう努力しなければならないと痛感します。

現在、地質標本館の鉱物に関する展示は、分類展示を中心に行っています。しかし、鉱物学的な解説の展示はなく、鉱物の物理的、化学的、結晶学的な説明なしに分類展示を見なければなりません。鉱物についての予備知識のない見学者のために鉱物学的解説の展示は必要かもしれせん。日本には世界的に珍しい鉱物を産するスカルンやマンガン鉱床が多く、我国を代表する鉱物産地として紹介することができたら良いと考えています。地下資源としての鉱物の展示は十分とは言えず、現在全体的な見直しを行っているところです。これから欧米の博物館で見聞したことを大いに参考にしながら、鉱物の展示を刷新してゆきたいと思います。

地質標本館はこの10年、博物館としての能力と権威を少しずつ認めてもらえるようになりました。私達も国民一般に対して奉仕の努力を忘れてはならないと思います。

---

BUNNO Michiaki (1990): Variety of mineral exhibitions in museums of Europe and U.S.A..

---

<受付：1990年5月23日>

---

## 新刊紹介

### 「鉱床学概論」 飯山敏道著

東京大学出版会, 196ページ, 3,296円(税込)

本書は、鉱床学のあらましを述べる概論で、次のような構成をとっている。まず1章で鉱床学の扱う有用元素について歴史的な由来や、採取するためのエネルギーコストなど、鉱床学として有用元素をとりあげる際の視点について述べている。2章で鉱床の形成にとり重要な物質の移動・濃集の機構について概観され、3章で基本的な研究手法について述べられる。4章以後7章までに、マグマ性、熱水性、堆積性の鉱床について論ぜられ、8章において資源の現状と将来について述べられている。章立てを見てわかるように本書の特色は、記述が研究対象ごとであり、研究手法は、それ自身を説明することよりも、それがどのようにして対象の問題解決に役立て

られるかに力点がおかれている。章末の考察課題もそれらをさらにおし進める内容である。また1章と8章は特に著者の個性がよくあらわれていて、歴史と技術と市民生活との密接な関わりがさまざまな視点から述べられており、専門化しすぎて、ともすれば木を見て森を見なくなりかねない傾向に倅さして資源問題の多面性に気づかせてくれる。本書の最大の特色は考察課題で、それは常に考える事を求める著者の姿勢がけくあらわれている。ここでとりあげられている課題の中には、「はじめに」に述べられているけうな初学者のみならず、我々資源問題にたづさわる者も常に意識しなければならない問題が多く含まれている。したがって、初学者以外の人でも知識(knowledge)を求めて読めば物足りない点もあるかもしれないが、知恵(wiadom)を求めて読むならば、大いに啓発されるであろう。(地殻熱部 竹野直人)